

## 内村鑑三の世界観と Shakespeare の人間観 (中)

前 田 利 雄

内 村 鑑 三

—— 世俗的商売的な American Christianity から

贖罪的霊的な Crucifixianity へ ——

現代は自己本位、人間本位の時代である。自己本位とは自己意識の意味である。自己意識は自己中心性を生む。Renaissance によって人は自己に目覚めた。自己知識の盛んな時代は、主観が高揚され、客観が低下させられる時である。主観の高められるところに、必ず自我の高揚があり、ここから解放運動がおこり、フランス革命と英国の名誉革命が発生した。そして現代は第二の Renaissance であり、人間中心の時代である。Marxism と Americanism は、この自己意識の二大潮流である。

靈魂の深きところにおける神秘の消息とかつていわれた宗教も今では、人間的神におきかえられた。物質的自我の解放が Marxism であり、肉欲的自我の解放が Americanism であるように、思想的自我の解放が現代キリスト教である。しかし自己中心の人生観にもとづいた自己の思索的努力により、真理に接近せんとする態度は、何も現代に限ったことではない。ユダヤ的キリスト教とローマ的キリスト教がそれである。ユダヤ的キリスト教は、律法の行為によって自己を義としようとする、キリスト教の倫理化を図る運動である。ローマ的キリスト教とはローマ・カトリック教のことであり、制度と儀式によって自己を義とする、キリスト教の芸術化の運動である。いずれも人の主観と努力によって神を人間の限界にまでひきづりおろしたものである。ユダヤ的キリスト教がパウロを迫害し、ローマ・カトリック教がルッテルを迫害したのは、彼らが人間的努力による神の幻影の破壊を恐れたからに外ならない。機械と生命が相容れることはない。そして現代ではこの人間の主観的神はアメリカ的キリスト教である。アメリカ的キリスト教は、事業教である。家庭、国家、社会の幸福と繁栄のために、信仰を手段として利用し、打算と能率的結果を重んずるキリスト教である。これは合理化を図るキリスト教といってよい。

倫理的、芸術的、合理的キリスト教はすべて人間の肉の深みから発した、人間的努力の所産である。このような自己中心の、人間本位の神と戦うべく、神中心の、神本位の、真理のための真理の光りをかかげるための戦士が必要とされてきた。パウロがその一人であり、ルッテルがその一人である。パウロはユダヤ的キリスト教を打破すべく選ばれた戦士である。倫理的律法的キリスト教を克服するためには、彼自ら律法の子として律法を守ることの愚を骨の髄までしる必要があった。「律法を行うことによって、すべての人間は神の前に義とせられないからである。律法によっては罪の自覚が生じるのみである。」(ローマ 3:20) という深い体験を通して、初めて「価なしに、神の恵みにより、キリスト・イエスによるあがないによって義とされるのである」(3:24) という神中心、恩恵中心の信仰に達したのである。このパウロにして初めてユダヤ的道徳的キリスト教に対抗し得たのである。

第二のパウロはルッテルである。ルッテルもローマ教会の忠実な下僕であったが教会に行詰まった。ルッテルは自己の内心の罪を青春に自覚して深刻な苦闘を戦った。罪の苦悶は遂に若

きルッテルをして、洋々たる前途を目の前にしつつも、エルフルト大学と法律に別れをつげさせて、アウグスチヌス派の一寺院に入らしめたのである。この修道院で彼が行った難行苦行は激烈であった。断食、祈禱、そして神学研究、これらはしかし、ルッテルに何の光明も与えず、彼は失望に失望を加えた。しかし慈悲深い師スタウピッツの指導により、ルッテルは福音の平和に導かれ、パウロのロマ書を注意深く読み始めた。ルッテルもまたパウロの「義人は信仰によりて生きん」という言葉によって、信仰の奥義をした。

「義者は信仰によりて生くべしとされる。その時、余は新たに生まれしかのごとく感じた。今や余は全然新たなる光明をもって聖書を見た。余は余の記憶に存するかぎりの聖語の全部を喚起して、これを対照して、この義の、まことに神がわれらを義としたまう義であることを覚った。何となれば、聖書におけるすべての他の記事が、この事に一致するからである。前には余が、はなはだ恐れし神の義なる言話は、今は慕わしき貴きものとなった。パウロのかの一言は、余りとりては樂園に入るための真の門である。」<sup>1)</sup>

ここにルッテルは、人の工夫によらずして、神の人のために備えたまいし救いをただ受動的にうけるという単純なる信仰によって、神に達する真理の道をしたのである。ルッテル時代のカトリックは、人の努力による制度、儀式、教義、教会によって人の理性によって知的に神の知識に到達しようとしていた。そしてルッテルも時代の子としてその誤謬を免かれることができず、人間的苦闘によって自分の中に神を求めようとしたのである。この単純なる真理を発見したルッテルは、複雑なローマ、カトリック教会の人間的神を土台よりゆすぶって破壊したのである。

第三のパウロは誰であるか。アメリカ的キリスト教に真向から刃をふりかざす者は、近代の戦士内村鑑三である。パウロが初めユダヤ主義の熱狂的信奉者であったように、またルッテルが初めロマ・カトリック教の忠実な子であったように、内村も不幸にもアメリカ的キリスト教の熱烈なる信者として、前半の信仰に入りしよりの30年の生涯の長きにわたって信仰の道に迷ったのである。アメリカ的キリスト教は敬虔の念に乏しく、数量を主に追い求める現世的キリスト教である。内村は明治10年、札幌の地において現世的米国人より、現世的キリスト教を聞き、これを真の信仰と思いこみ、教会に入り、教会をたて、洗礼をうけ、教会信者を真の信者と思いこんで、信仰のくびきを共にするとの理由から、不信者ともしらずに交わって、迷いに迷いて罪の解脱を達することができなかった。社会と国家の益を計る事業教と道徳を重んずる現世中心のキリスト教からの脱皮は、内村がドイツの敬虔主義(pietism)の風のあったアメリカ人 J. H. Seelye によって Amherst 大学にて感化をうけたことから始まった。この偉大な総長によってキリスト教の福音的真理に目を開かれたのである。それまで貧民救済、醜業婦救済が内村の生涯の目的であったが、この Seelye の非米国的信仰によって今までの己が善行によって神の前に義たろうをする内省をやめて、仰せんすること学んだ。

Seelye の教えは、キリスト信仰の奥義を伝えてやまない。

内村、君は君の内をのみ見るからいけない。君は君の外を見なければいけない。なぜ、おのれに省みることをやめて、十字架の上に君の罪をあがないたましいイエスを迎ぎみないのか。君のなすところは、小児が植え木を鉢に植えて、その成長を確定めんと欲して、毎日その根を抜いて見ると同然である。何ゆえに、これを神と日光とにゆだね

奉り、安心して君の成長を待たぬのか。<sup>2</sup>

これを契機として内村の回心が始まる。修行または善行によって救われるのではなく、神の子を信ずるによって救われるということをシーリー先生によてはっきりと学んだのである。内村が後年、Seelye について述懐しているように “He (Seelye) is my father in faith,” すなわち彼は内村の靈魂の父となった。

内村は米国人によって米国式の現世的キリスト教より救われたのである。しかしそれまでの半生を現世主義に迷わしめたアメリカ的キリスト教を真理の敵としてみなした。そして現代の最大のキリスト教の敵は、この世俗的、物質的アメリカ主義以外の何者でもない。

余はキリスト教を信すべきであった。しかし米国式のキリスト教を信ずべからずであった。米国式のキリスト教はこの世の宗教である。靈的なよりはむしろ肉的な宗教である。敬虔の念いたって薄く、主として教と量とを追求する宗教である。この世を感化するをもって第一の目的とする宗教である。この世の愛国心とほとんど異なるところなき宗教である。そうして不幸にもかかるキリスト教を信じたる、しかり、信ぜしめられたる余は、信じてかえって多くの不幸を招いた。余は愛を主張して愛を知らざる教会信者と交際を結んだ。余は不信者よりもより悪しき人々の社会に入った。余は知らず知らずのうちに偽善者となった。余は自己の本性にそむいたる事をなさんとした。教会を建てんとした。用なき教義を守らんとした。……<sup>3</sup>

内村は米国式の現世的宗教を脱して、この世のすべての教会より脱したとあるように、内村の前半生は、教会からくる不幸の連続といって差しつかえない。世俗の教会から脱して初めて内村は、この世的にも幸福をつかんだ。しかし内村がいかにアメリカ的現世教を忌み嫌っても、いかに現世主義に迷ったことを悔いても、その中に神の摂理を我々は感ずる。それは丁度、ルッテルがカトリック教会の形式主義におちいったことから、十字架のイエスを迎ぎみることができたよう、内村もアメリカの現世主義におちいて、その物質主義の苦さをつぶさに体験したことから、真の単純な信仰に到達したといえるからである。

信仰は完全な self-surrender である。神に対して自己を明け渡すことである。従ってそこに人間的な要素が芥子粒でも残ってはならない。人間の中には何の良き物もないことを認識して、徹底的に神の側の恩恵のみによって、功なくして神の子の血によって自己の罪の贖いを信ずることである。人間的な努力や工夫の介入が、少しでもあれば、そこには神の王国は存在しない。Karl Barth が神の實在は human possibility と絶対に区別されるべきであると<sup>4</sup> いったのは、このためである。human possibility として神が理解されるならば、それは性的、知的欲望と同じ次元のものであるからである。“for the reality of God still remains something which is distinct from the reality of human lusts, and the yearnings of religion are of the same order as our sexual and intellectual and other desires.”<sup>5</sup> そして内村は人の努力と工夫による神への接近をすでにのべたように、半生を犠牲にして試みて、失敗の体験を味わっただけに、人間的分子の介入を生死にかかわることとして拒絶する。内村の人間に対する拒絶の精神は、実さいには彼自らに対してなされた非妥協の精神である。内村はいう、

Faith is not thinking; what a man thinks is not his faith. Faith is rather

being; what a man thinks is not his faith. Thinking is only a part of being; rather a superficial part, a mode of the being's accomodation with the material universe. So we can never get faith by thinking; no amount of thinking, however rigorous and accurate, can give us faith. Faith is the soul's right attitude to God; it is the spiritual being in action, firstly in relation to the Creator, and secondly, in relation to the creation. The soul's primal energy is in its will. It grows and comes to know the Creator by willing to do His will. John 7; 17. Willing and not thinking is the way to His teaching. Willing, of course, is not mere wishing; it is the will to do,—wishing and doing at the same time. The soul by willing to do God's will, knows God and His teaching.<sup>6</sup>

信仰とは、内村にとって人間の意志でなく、神の意志を行うことであり、そのためには、自己を神の意志の道具とすることである。自己が動くのではない。神によって動かされるのである。神の大なる力によって神の意志を遂行するようにせしめられる必要がある。ここから内村の信仰の受動的活動性という矛盾極まる表現が生まれる。信仰とは、自己を受動的状態において、自分を全能の神に引渡して、あらたな力を供給されることであるが、それだけでとどまるのではなく、より高いものからうけた上からの力によって、神の意志をおこなうことである。従って“passive activity”という内村独得の表現が生まれる。

Faith is the soul in passive activity. It is the soul letting itself to be acted upon by the mighty power of God. Passive though faith is, it is intensely active because of the power that works in it. This is the paradox of faith; and he who knows not the paradox, knows not faith. The classical passage on faith is the well-known word of St. Paul in his Epistle to the Ephesians:

For by grace have ye been saved through faith: and that not of yourselves, it is the gift of God: not of works, that no man should glory. For we are his workmanship, created in Christ Jesus for good works, which God afore prepared that we should walk in them. —Eph. 2: 8-9.<sup>7</sup>

信仰は感情にあらず、学識にあらず、実験である。神と相知るの実験である。ゆえに、彼になろうて愛し、彼のために戦い、彼と共に苦しみて、獲らるるものである。信仰の善き戦闘を経て得し信仰によりて、われらは救わるるのである。人は信仰によりて救われ、信仰は行為によりてささえられ、かつ強くせらる。行為なくして、信仰はついに滅えてしまうのである（ヤコブ書 2. 18）。<sup>8</sup> (1917年12月「聖書之研究」)

神は客観的實在であり、人間の主観によって左右さるべきものではない。人間の思索や感情や行為によって作られる神は、人間と全く変りないもの、人間の主観の投影にすぎない。現代主義(modernism)とは、人間的思索を信仰と同一視することであり、人間中心の人生観からわり出された物質的、肉欲的神の源泉である。この自己中心性から、社会、国家の幸福のための事業教としてのキリスト教、また人生問題解決のための教養としての倫理的キリスト教、はなはだしきは、失恋をいやすための慰安としての感傷的キリスト教が生ずる。このようなモダ

ーニズムの真中にあって、内村の信仰のみがどうして彼らの現世的、肉欲的キリスト教と違って、来世的、靈的キリスト教であるのか。どうしてモダーニズムの主観的、幸福追求的キリスト教と違って、客観的、義追求的キリスト教であるのか。

それは一言でいえば、内村の信仰がパウロとひとしく、「そはわれ中なる人にては神の律法を悦べど、わが肢体のうちに他の法ありて、わが心の法と戦い、我を肢体の中にある罪の法の下に虜とするを見る。ああわれ惨めなる人なるかな、此の死の体より我を救はん者は誰ぞ。」という自分の罪にたえずして、これを取り除かれるために、神の子の十字架上の血による贖罪の福音に追いやられたからである。

慰安、教養、事業を目的としてキリスト教に入り来たる者は、わずかにその外皮に接するまでであって、福音の神殿深き所に神の御顔を拝することはできない。キリスト教に入る唯一の正道は罪の観念である。人が自己の罪に覚め、自己の、永遠に罰せらるべき罪人たるに気づき、いかにしてその無限の呪詛より脱するを得んかと思ひ煩いて苦悶し、救拯の道を探し求めてやまざる時に、神の備えたまいし、その聖子が十字架の上に血を流して遂げたまい罪の消滅の福音に接して、これを信じ、これによりすがりて、ただひとえに天父の恩恵により、生命を授けられんことを祈り求めて、罪の身そのままを聖前に投げ出すに至って、初めてキリスト教の真理の何たるかがわかるのである。<sup>9</sup>

かくして、この罪の意識の強烈さからくるキリスト教は、罪をあがなう十字架という客観的事実を仰上する信仰以外の何者でない。ここから内村にとって「キリスト教とは十字架教」なのである（“Christianity is Crucifixianity”）。すべての善行もすべての真理も十字架の上の聖子の血による、人の罪の贖いという神一方の恩恵をぬきにしたものなら、それはキリスト教でもなければ、また真の善行でも真理でも全くないという極めて狭隘な真理観である。救いの道はただ一つ、十字架上のキリストを仰ぎ見みことのみ「十字架抜きのキリスト教を考うることができない。」という内村の生命にかかわる発見がであ。

「しかり、わが信仰をもっても救われぬ。神の恩恵によって救われるのである。神の恩恵、神の恩恵、万事はこれに帰するのである。これありせば、罪人も救われるのである。悪人も救われるのである。」

「われにわれあるなし。神、われにありて働きたもう。われにわが言辭あるなし。わが言辭は神の言辭なる聖書なり。われすでに無き者にして、われの今生けるは、われ生けるにあらず、キリスト、われにありて生けるなり（ガラテヤ書 2. 20）。」<sup>10</sup>

十字架の発見という動かし難い客観的事実なくしては、真の信仰が得られない。神の恩恵という客観的事実にあづかる conversion が信仰であるとき、「余は余の信仰をも神より求むるのみ」というパウロやルッテルさえ徹底しなかった、神中心性の大発見が、コペルニクスの太陽中心説の発見よりも、遙かに重大性をおびてくるのである。

さて、この内村の信仰が Shakespeare の劇といかなる関係があるのかという問題が生じる。内村の信仰そのものが Shakespeare の人間観にも深い関係をもっているけれども、それよりも一層直接に関係するのは、この内村の徹底した神の恩恵によって人は救われるという思想の

パターンである。人が自己に頼ること 少なければ少ない程、成功すると内村が晩年に述懐した。“I know the success of my life depends upon how little I rely upon myself, and how much upon my Rightful Owner.”<sup>11</sup> この言葉の中に、内村がアメリカ的キリスト教の現世主義におちいって、自己の思索と自己の行為によって自己を救わんとした失敗と自己を引渡して大いなる他者をして自己を保持せしめて、他者の手先となって大なる業をなした成功が要約されている。これが Shakespeare において Hamlet に最も著しくあらわれている。それで考察を Hamlet にすすめてゆく。

## Hamlet

— from “rebellious hell” to “heaven ordinant” —

内村鑑三の信仰が、主観的キリスト教より客観的キリスト教へと conversion したように、Hamlet の信仰も、自分の画策によって復讐を成し遂げようとした自己中心の信仰から、人間的努力の完全放棄による、他者中心の信仰へと飛躍する。内村が人間的思索や事業によって己が魂の救いを完成せんと必死の試みをなしたけれども、それによって平安な魂を得ることがなかったように、Hamlet も自己の画策によって復讐の実現の希望は絶無になった。しかし内村が、自己の努力に失敗を積んで、失望に失望を加え、「刀折れ矢尽きて、いかんともするあたわざるに至りし」とき、十字架を仰ぎ見ることによって、救の確証を得て、平安を得たように、Hamlet も自分の contrivance に苦い失敗を味わって、自己の力に深い幻滅を感じ、自己による復讐を放棄して、摂理 (“providence”) にすべてをゆだねたときに、彼の念願の復讐が成就できる。

内村がモーセの十戒 (Ten Commandments) を魂の救われていない先に、守ろうとして、かえってそのいましめを破ったように、Hamlet もモーセならぬ Ghost の commandment (“thy commandment”) (I. v. 102) を忠実に果たそうとして、かえって亡霊のいましめを破って見当違いの人を殺害してしまう。

亡霊は Hamlet に復讐の命令とその方法について、信仰の奥義を語っている。

Let not the royal bed of Denmark be  
A couch for luxury and damned incest,  
But, howsoever thou pursu'st this act,  
Taint not thy mind, not let thy soul contrive  
Against thy mother aught; leave her to heaven,  
And to those thorns that in her bosom lodge,  
To prick and sting her.

I. v. 82-88

“most foul murder” の復讐をせよと命じながら、亡霊は矛盾した、不可能な方法を命じる。すなわち “contrive” (企てる) ことをしないで、魂を汚さないで果たせと。企てることなくして、魂を汚すことなくして裏切者を殺害することはできない。内村がモーセの十戒を第九戒までは人間の力で (企てることによって) 完全に守れたけれども、第十戒の「汝、むさぼるなかれ」という人の内面の罪を弾劾したいいましめに及んでは、全く実行不可能な命令である

ので、進退極まったというのがそのことと類似する。心中の悪念を断つ力は人には全くないからである。それと同じように、企てることなくして人は如何にして仇を復讐できようか。これが Hamlet に課せられた、生死にかかわる問題となってくる。

しかし Hamlet は、亡霊のいましめを守らない。天の万軍を呼び、大地に叫びそして地獄との結婚を辞さない彼は、実際には commandment を霊に刻むのではなく、頭 (brain) に住ませる。

O all you host of heaven! O earth! What else?  
And shall I couple hell?

— — — — —

And thy commandment all alone shall live  
Within the book and volume of my brain,  
Unmix'd with baser matter.

I. v. 92-104

しかし戒めを守ることによって戒めを成就することは不可能である。しかし彼は自分の理性によって亡霊の命令を守ることを決意した。

Paul は律法の無力なることを律法を守ることによって、血を流して体験した。彼はいう。

Therefore by the deeds of the law there shall no flesh be justified in his sight:  
for by the law is the knowledge of sin.

Ron. 3:20

内村は Paul のこの言を説明する。

……道徳は人をして罪を語らしむるに有力であって、人を救うには全然無力である。しかし道徳の力と無力とはここで明らかである。道徳は人を罪人と定むるにおいてきわめて有力である。しかしその他の点においては全く無力である。<sup>12</sup>

Ghost's commandment を守ろうとした Hamlet のその後の行動は、人がいかに自己に依り頼んで事を成すことが失敗に終るかということの証明に外ならない。

彼は自己の力で画策によって復讐を成就しようとして、憎悪の念にかられていたことが Ophelia との scene で証明される。彼女の部屋に侵入した場面をみてみよう。

Ophelia を驚かした Hamlet の侵入と乱れた服装は多くの学者の論説をまきおこした。Dover Wilson: Hamlet's "mental instability obvious in the cellarage scene, so far from being temporary, had grown more intense meanwhile."<sup>13</sup> Wilson Knight: "This is no mock-madness.... But absolute loss of control is apparent only in his dealings with Ophelia."<sup>14</sup> A. C. Bradley: "His main object in the visit appears to have been to convince others, through her, that his insanity was not due to any mysterious cause, but to this disappointment (in love), and so allay the suspicions of the King."<sup>15</sup> J. Q. Adams:

“This slovenliness in costume has usually been interpreted as the pose of the forlorn lover.... But Hamlet's physical appearance cannot be explained on this score. He has 'no hat upon his head'; the sad lover is invariably represented with his hat plucked low over his eyes.... Hamlet's slovenly and foul dress is what one should expect from a 'natural' or idiot; and as such it is in perfect keeping with his announced plan of putting on an 'antic' disposition.”<sup>16</sup> しかし Hamlet は狂気でもなければ、また Dr. Johnson がすでにいったように、狂気のまねをしたこともない。また “antic disposition” を着けるような余裕は、この場面の Hamlet にはあり得ない。我々は、Shakespeare の作品全体を通しての客観的事実を尊重し、また学者の理論でなく、人間的な経験に基づいて「人間関係に対する鋭い共感」(“a quick sympathy for human relationships”)をもって考察すべきである。

何故にそれでは Hamlet は Ophelia の部屋に押し入ったか。Grebanier は Hamlet の精神状態を次のように説明している。彼女が Hamlet を拒否したことが彼の心を苦しめている。また彼の母の不貞が彼にすべての女性は脆いものであるという烙印をおさせた。亡霊の打明けについての複雑な苦悶と理由もなく彼の愛を拒絶した Ophelia に対する苦い思い、しかも彼が彼女の愛を最も必要としたときに彼女が愛を拒否したというこの二つの苦痛にはさまれて、着のみ着のままで床の上に身を投げ出して不確さのあがきの中で不眠の夜を過ごし——“and then suddenly, with characteristic impulsiveness, jumping up, resolved to find out at once by fronting Ophelia without warning, whether or not she is such another as Gertrude? Can we not see him, full of this purpose, dashing to her room just as he was, his jacket half-opened, his stockings rumpled, his face white, his knees trembling, looking like a vision out of hell?”<sup>17</sup>

Hamlet 学者として最もすぐれた論文の一つを草したこの Grebanier の批評は、最近では定説となってきた。Leonore Brodwin も大体この考えに近い。確かに Ophelia は、父のいいつけ通りに、王子との交際を全く断っている。

as you did command,  
I did repel his letters and denied  
His access to me.

II. i. 108-110

Grebanier のように彼女もまたもう一人の Gertrude でないか否かをみるために押し入ったという考えは真実であろう。それは Ophelia の comment によって証される。

He took me by the wrist and held me hard,  
Then goes he to the length of all his arm,  
And, with his other hand thus 3er his brow,  
He falls to such perusal of my face.  
As he would draw it. Long stay'd he so;  
At last, a little shaking of mine arm,  
And thrice his head thus waving up and down,



He rais'd a sigh so piteous and profound  
That it did seem to shatter all his bulk  
And end his being. That done, he lets me go,

II. i. 87-96

彼が彼女を腕の長さだけ距離をおいてつかみながら、充分に彼女の顔を見たことは何を意味するか。そして一事に精神を集中するときの身振である、片手を額の上において何を考えたか。Grebanier はもし彼女が無垢であるなら（やましいところをもっていないなら）彼の凝視にたじろぐことなく落着いてみつめ返したであろう、しかし Ophelia は Hamlet が噂通り、気が狂っているからこそこのような態度をとるものと思って驚き、動揺して顔をそらして赤らめたが、Hamlet の目には彼女が彼を裏切っているのでこのような反応をするように思えた。彼は彼の最も恐れた猜疑の正しかったことを確信して、それを表示する身振り——三度點頭したと説明する。Hamlet の凝視に対する彼女の反応の仕方が Leonora Brodwin の場合は Grebanier と違って、彼女が全くやましいところをもっているようにみえないことが、彼の母が彼の父に対して無垢にみえていて実は裏切りをしていたように、彼女の不実を証すると Hamlet は考える。また彼が彼女の顔をみつめているうちに、彼女に他人が夢想もしないような淫乱の潜在能力——彼女が狂ったときにあらわにした好色の素質を感じたかもしれない。この場面で彼女は恐怖のあまり、彼を慰めたり理解しようとは何もしなかったので、それが一層彼を失望せしめ、女姓はすべて不実であるという考えを強めた。

Her face may look innocent, as it most assuredly does, but this only proves her falseness, that, like his mother to his father, she can appear loving and then immediately change her behavior. And as he looks so deeply into her eyes, he may perceive some potentiality for lust which nobody should suspect but which is later revealed by the sensual vulgarity she displays in her insanity. Finally, even in this scene she fails him, for she stands with mute terror at the sight of his anguish and does nothing to try to understand or calm him. The effect of this is to destroy whatever lingering love he may still have felt for her and to confirm his belief in the frailty of all women.<sup>18</sup>

しかしこの両批評家のいうように、Shakespeare は Ophelia との scene で love-story を第一の目的としてかいたのであろうか。*Julius Caesar* における Brutus と Portia の scene (II. i) や *Henry IV* の Hotspur と Lady Percy の場面 (II. ii) は、夫婦の愛情を描くことが主でなくて、妻の comment によって、夫の精神状態を示すのが主である。そのように Hamlet と Ophelia の scene も、互いの愛が主でなく、Brutus や Hotspur が大事を前にして平常と全く変った態度や心理状態になっているように、Hamlet も復讐を前にしていつもの彼と違っていることをのべるのが目的である。Brutus と Portia, Hotspur と Lady Percy は夫婦であったから、妻の目に映じた夫の姿をえがけばよいが、Hamlet と Ophelia は知りそめた恋仲であるので、夫婦のように互いに会話がなないので、Ophelia が Hamlet と出会い、そして更にその印象を父に語るように、Polonius が彼女に Hamlet の愛を拒絶するように命じるのである。そのように Shakespeare は意図している。

Portia による Brutus の comment や、Lady Percy の comment は不思議にも Ophelia による comment と共通している点がある。しかし批評家は全くこの三者の共通点や類似点を言及していないのは不思議である。Portia はいう。

You've ungently, Brutus,  
Stole from my bed ; and yesternight at supper  
You suddenly arose, and walk'd about,  
*Musing and sighing*, with your arms across,  
And when I ask'd you what the matter was,  
You *star'd* upon me with ungentle looks.  
I urg'd you further ; then you scratch'd your head,  
And too impatiently stamp'd with your foot ;  
Yet I insisted, yet you answer'd not,  
But, with an angry wafture of your hand,  
Gave sign for me to leave you. So I did,  
Fearing to strengthen that impatience  
Which seem'd too much enkindled, and withal  
Hoping it was but an effect of humour,  
Which sometimes hath his hour with every man.  
*It will not let you eat, nor talk, nor sleep,*  
*And could it work so much upon your shape*  
*As it hath much prevail'd on your condition.*  
I should not know you, Brutus. Dear my lord,  
Make me acquainted with your cause of grief.

*Julius Caesar* II. i. 237-256

Brutus も Hamlet が hell と婚して plot によって vengeance を決行しようとしているように、*"butchers"* の一人である自分を *"sacrificers"* の一人にしようと自己弁護しながら、血で自分の手を汚す行為を plot している。彼は食欲もなくなり、黙って考え込み、不眠の夜を過ごす。これは Hamlet も同じである。Polonius は Hamlet についていう。*"And he, repulsed,—a short tale to make,—/ Fell into a sadness, then into a fast, / Thence to a watch, thence into a weakness, / Thence to a lightness."* (II. ii. 146-149) また内面の問題は Brutus の姿や精神にも影響を与えていることも Hamlet によく似ている。Portia の comment はつづく、

Is Brutus sick, and is it physical  
To walk *unbraced* and suck up the humours  
Of the dank morning? What! is Brutus sick,  
And will he steal out of his wholesome bed  
To dare the vile contagion of the night,  
And tempt the rheumy and unpurged air

To add unto his sickness? No, my Brutus;  
*You have some sick offence within your mind*  
Which, by the right and virtue of my place,  
I ought to know of;

*Julius Caesar* II. i. 261-270

Brutus が “wholesome bed” から “*the vile contagion of the night*” にさまようのは、すでに “thoughts black” にとらわれていることを示す。そしてそのときの “unbraced” の服装も、Ophelia の Comment による Hamlet の外見と一致する。

Lord Hamlet, with his doublet all unbrac'd;  
No hat upon his head;

II. i. 78-9

Hamlet も Brutus のように、Hell の力にとらわれている。

Pale as his shirt; his knees knocking each other;  
And with a look so piteous in purport  
As if he had been loosed out of *hell*  
To speak of *horrors*, he comes before me.

II. i. 81-84

*Henry IV* の Hotspur も妻の Lady Percy の comment によって Hamlet, Brutus と同じ挑候を示していることがわかる。

O, my good lord! why are you thus alone?  
For what offence have I this fortnight been  
A banish'd woman from my Harry's bed?  
Tell me, sweet lord, *what is't that takes from thee*  
*Thy stomach, pleasure, and thy golden sleep?*  
Why dost thou *bend thine eyes upon the earth*,  
And start so often when thou sitt'st alone?  
Why hast thou lost the fresh blood in thy cheeks  
And given my treasures and my rights of thee  
To *thick-eyed musing and curst melancholy?*  
In thy faint slumbers I by thee have watch'd,  
And heard thee murmur tales of iron wars,  
Speak terms of manage to thy bounding steed,  
Cry, 'Courage! to the field!'

— — — —  
*Thy spirit within thee hath been so at war,*

And thus hath so bestirr'd thee in thy sleep,  
That beads of sweat have stood upon thy brow,  
Like bubbles in a late-disturbed stream;

Henry IV, Pt. I. II. iii. 42-64

Hotspur が “thick-eyed musing and curst melancholy” におちこんでいることは、Claudius の説明によって Hamlet もまた melancholy にかかっていることと一致する。 “There's something in his soul / O'er which his melancholy sits on brood;” (III. i. 173-4) Hamlet 自身も悪魔が自分の melancholy を利用して害をなすかもしれぬといっている。

“the devil... / Out of my weakness and my melancholy... / Abuses me to damn me.” (II. ii. 636-640)

Brutus も “walk'd about / Musing and sighing” である。そして Hamlet の melancholy も Brutus の melancholy も Hotspur の melancholy も、A.C. Bradley のいう moral shock からきた melancholy<sup>19</sup> とは全く違う。後に述べるように、自分の魂を汚し、contriving によって事を果たすこと、一言でいえば、revenge または private justice に人が走らんとするときに、悪夢を人は見ることからくる musing である。Eleanor Prosser はその洞察深い、緻密な研究によって Shakespeare が全作品を通して、private blood revenge を否としていることをのべている。Brutus は Caesar を暗殺したけれども、Antony によって打ち負かされ自殺を選び、Hotspur の anointed King に対する叛逆も、彼の死によって失敗に帰していることから Shakespeare の意図がわかる。

The evidence suggests, rather, that his plays rely on the orthodox ethical and religious injunctions against it (private blood revenge). ...Again and again the surrender to revenge is seen as the surrender of reason, the surrender at least to rashness and at most to madness.<sup>20</sup>

このような証拠から、Hamlet が Ophelia の愛の不実を確かめるためにきたことが、正しい解釈であろうと否とにかかわらず、この Ophelia との scene で見落としてならないのは、Hamlet は彼女の comment “As if he had been loosed out of hell, / To speak of horrors” によって hell の中にとらわれていることである。この点について Leonora Brodwin は極めて鋭い解釈を下している。“Ophelia's comment...strengthens the view even further that the ghost has been playing a devilish role towards Hamlet both in his disclosures and commands, for Hamlet's soul now appears to be in the power of hell.”<sup>21</sup> そして Hamlet 劇において hell とは、revenge を象徴することを考えるべきである。

private revenge は hell と婚して、理性を宙天の高きまで吹きとばし、無鉄砲 (rashness, indiscretion) または逆上 (madness) に走る。そして hell は black によって象徴されるので、revenge を企てる主人公は、night に musing (melancholy) にふけて contrive する。Hamlet は我々の目の前にあらわれたときから “nighted colour” の suit を身につけ、night の真只中で Ghost と出会い、Gonzago 殺しの劇も night におこない、その Gonzago を殺す甥の Lucianus は、“midnight weed” からとった毒液 “mixture rank” を眠っている王の

耳に注ぎ込んで殺す。Lucianus は王の甥ということをわざと強調したせりふがら、我々に Lucianus が兄殺しの Claudius でなくて、叔父を殺さんと企てる Hamlet 自身であることを示す。その Hamlet の分身は、Hamlet の hell の revenge を象徴するかのようになり、彼自身の口によって黒い大がらす *raven* にたとえられて説明される。

Come: the croaking *raven* doth bellow for *revenge*.

III. ii. 269

黒と復讐の聯想がここで形づくられている。そして Lucianus の思いは black であり、彼の手にする毒は地獄の女神 (the goddess of hell and sorcery) である Hecate によって呪いの毒気を三度あてられ、汚されたものであって、これが人のうたたねをねらって人の命を毒さんと plot する。black—毒 (mixture rank)—hell—revenge という聯想が生じる。これは Hamlet が復讐の憎しみに任せられていたなら、自己を passion's slave にして、暗闇の夜を利用して呪いをもって画策したであろうことが想像される。Lucianus のせりふは Hamlet 自身の言葉でもある。

Thoughts *black*, hands apt, drugs fit, and time agreeing;  
Confederate season, else no creature seeing;  
Thou mixture rank, of *midnight weeds* collected,  
With *Hecate's ban* thrice blasted, thrice infected,  
Thy natural magic and dire property,  
On wholesome life usurp immediately.

[Pours the poison into the sleeper's ears.]

III. ii. 270-276

芝居の始まる寸前、彼は Ophelia に let the *devil* wear / *black*, for I'll have a suit of *sables*. (III. ii. 138-9) といって、彼の着ている黒い喪服が悪魔の黒をあらわすことを示唆している。また何よりも彼の復讐が黒い地獄の血なまぐさをおびていて、神の祝福でなく悪魔の呪いを招くものを示すものは、彼自身が復誦した、ギリシャの英雄 Pyrrhus 王のトロイの Priam 王に対する復讐の一節である。

The rugged Pyrrhus, he, whose *sable* arm  
*Black* as his purpose, did the *night* resemble  
When he lay couched in the ominous horse,  
Hath now this dread and *black* complexion smear'd  
With heraldry more dismal; head to foot  
Now is he total gules; horribly trick'd  
With blood of fathers, mothers, daughters, sons.

II. ii. 483-489

Pyrrhus 王の着けている黒い甲冑 (“*sable* arm”) は Hamlet の “a suit of *sables*” を連想させ、前者の黒い意図 (“*black*” as his “purpose”) は計策にふさわしい夜 (“*night*”)

によってかくされ、彼の黒い顔色 (“black complexion”) はトロイの人々の血で汚れている。これは Hamlet の “Hell” と “horrors” の象徴である。そしてそれから彼が王の良心をつかんで復讐の地盤と証拠をかためたとき、今までおさえていた復讐の地獄の黒い毒蛇が頭をもたげているのに読者は気づくであろう。

'Tis now the very witching time of night,  
When churchyards yawn and hell itself breathes out  
Contagion to this world: now could I drink hot blood,  
And do such bitter business as the day  
Would quake to look on. Soft! now to my mother.  
O heart! lose not thy nature; let not ever  
The soul of Nero enter this firm bosom;  
Let me be cruel, not unnatural;  
I will speak daggers to her, but use none;

III. ii. 413-421

Hamlet はしかしこの言葉と違って、“speak daggers” でなく、“use daggers” を数分後に行っているのである。Polonius を王と間違えて、刺し殺すという “a rash and bloody deed” をなす。黒い王 Nero の魂が彼にのりうつったのである。

彼が王の祈りをみたときにも、王を地獄に送りたい一念から、

or about some act  
That has no relish of salvation in't;  
Then trip him, that his heels may kick at heaven,  
And that his soul may be as damn'd and black  
As hell, wherto it goes.

という。救いをもたぬ行為の最中に人を殺して、その人の魂が地獄と同じく黒くかつのろわれているようにすることが復讐であるというのがそういう Hamlet 自身が、全く復讐の憎しみにみだされて、彼の魂は “damn'd and black / As hell” となっていることが irony である。

Othello でも主人公が復讐にかられて、理性を失うときは、地獄からの黒い憎しみを呼び求める。

Arise, black vengeance, from the hollow hell!  
Yield up, O love! thy crown and hearted throne  
To tyrannous hate. Swell, bosom with thy fraught,  
For 'tis of aspic's tongues!

Othello. III. ii. 448-451

このようにみると、Ophelia の *As if he had been loosed out of Hell / To speak of horrors* という Comment は、そのように彼が見えるというのではなく、事実彼は hell の中に

いたから hell の horrors を語りにきたのであるという考えを強める。多くの批評家は Hamlet の傷ついた愛 (“despis’d love”) に観点をおくので、この重大な点を見過ごしている。Wilson Knight はしかしこの点を見逃がしていない。“Hamlet, indeed, was in truth ‘loosed out of Hell to speak of horrors’.”<sup>22</sup> といっている。Ophelia の comment を通して Shakespeare は Hamlet が叛逆を企てる Hotspur や private justice を図る Brutus と同じく、自己の力に頼って revenge を企てることからくる精神や姿形の変化を我々に印象づけようと企てている。そして Hamlet は、神に頼らないで、自己に頼ることから、他人の救いまたは支えを要してきている。彼が Horatio に打明けたこと (III. ii. 81-82) から、それがうかがえる。彼女に復讐の悪夢になやまされる心の重圧を打ち明けて心の苦痛の軽減を期待したけれども、彼女は彼の地獄からきたような蒼白な顔 (“pale as his shirt”) をみて驚がくし魂を失いかけ、噂の通り彼の精神に異常がきていると思い込んでいるので、彼女の動揺と不安の姿をみては Hamlet も最初の期待をすてざるを得ず、同時に女性はすべて不貞であるという確信を強めて一層愛の傷を深めて、深い失望 (“a sigh so piteous and profound”) から絶望におちいった (“to shatter all his bulk / And end his being”) ものと考えられる。彼女の驚きの程は彼女が父親に報らせるとき、最初に彼女の口をついた言葉が “Alas! my lord,” であったことから推測できる。

彼が彼女の部屋に入った理由が Grebanier や E. Prosser のいうように、彼女の不実と良心をつかむためであったとしても、男性が女性の部屋に侵入した動機はやはり好色または恋心である。Grebanier は愛を拒絶されたのに、彼女に会いたがることはおかしいという。しかし袖にされてますます恋にもえてくるしんだのは Rosaline にはねられた Romeo であり、また女性に手ひどい挨拶をされたのに、その女性が死んだとき彼女の墓に花をもって消えない愛の敬意を払いに行き、そこに来合わせた Romeo とけんかして命をおとしたのは Juliet に無愛想にされた Paris である。直接の理由が彼女の良心をつかむことであっても、女性を心の崇拜として神位にまで高めているからこそ、すなわち女性を神以上に尊いものとして信仰するからこそ、女性の想像上の不実が最大の問題となってくるのである。Shakespeare は男性の盲目的愛、女性偶像崇拝性を誤解なく伝えるために、Hamlet をして彼女にあてた love-letter の冒頭にこの心の状態をかかしめている。

*To the celestial, and my soul's idol, the most beautified Ophelia,—*

II. ii. 109

Ophelia は彼にとって正に天的な存在であり、靈魂の偶像であり、すべて神格化されてきていることを上の言葉は証明する。しかも彼女が彼が思うような不実な女性では実際はないという事実が、彼の愛の自己中心性をいやがうえにもきわだたせる。nunnery scene においても Shakespeare は Hamlet の obscenity と barbarism を彼の ego-centered の態度——具体的には private justice と lust——の結果であることを、Ophelia の innocence によって暗示している。nunnery scene の Hamlet と brothel scene の Othello は全く共通した egoistic love の所産であり、二人の女性は男性の egotism の犠牲となっている。

“Wars and lechery” と Thersistes は美女 Cressida に戦争の中で愛を寄せる二人の男性 Troilus と Diomedes のことを批評する。ギリシヤ側に人質としてとらえられる Cressida に色目をつかう Diomedes は “But gives all gaze and bent of amorous view / On the fair

Cressida" (*Troilus and Cressida* IV. v. 281-2) と comment されている。復讐に狂う Hamlet も "such perusal of my face" と comment されている。この彼女の顔に対する凝視は彼の恐れることを彼女の顔の中によみとることとのみに解されてはいけない。彼の愛情の表現と解されるからである。Hamlet が Ophelia に対して抱いていた深い愛が後になって（芝居の scene と 墓場の scene で）明白となってあらわれているからである。（愛が手紙のつき返しによる拒絶では減じないことをも同時にこれらの scene は証明しているが。）この場合の Hamlet は主戦論の Troilus に酷似する。恋に狂う Troilus は人間の手段に訴える private justice を主張する。

Paris should do some *vengeance* on the Greeks.

*Troilus and Cressida* II. ii. 73

Hamlet も復讐を独りで絶叫する。

Bloody, bawdy villain!

Remorseless, treacherous, lecherous, kindless villain.

O! *vengeance*!

II. ii. 616-618

Troilus はそのけっか Hector のいう "the hot passion of distemper'd blood" に支配され、Hamlet は自らいうように "passion's slave" となる。恋の喜びに官能を酔わせる Troilus は、"The imaginary relish is so sweet / That it enchants my sense." (III. ii. 18-19) という。女姓を神とあがめる Hamlet も obscene な喜びにふける。Troilus が彼女に対する愛の不変を鋼鉄や太陽にたとえて誓うとき、Hamlet も太陽や星が変わろうとも、自分の愛は変らねことを誓う。

As true as steel, as plantage to the moon,  
As sun to day, as trurtle to her mate,  
As iron to adamant, as earth to the centre,  
Yet, after all comparisons of truth,  
As truth's authentic author to be cited,  
'As true as Troilus' shall crown up the verse  
And sanctify the numbers.

Troil. III. ii. 184-190

Doubt thou the stars are fire;  
Doubt that the sun doth move;  
Doubt truth to be a liar;  
But never doubt I love.

Ham. II. ii. 115-8

"Wars and lechery" は神を信じない自己中心の人生観から生じた双生児であって、また自



己中心性の象徴でもある。Milton の *Paradise Lost* に Chemos, th' obscene dread of Moabs Sons (淫らな神ケモス) が Moloch homicide (殺人者モロク) に接近して住んでいる。"lust hard by hate" (P.L. BK. I. 417) (憎悪と並ぶ淫欲)。憎悪と淫欲が必ず同時にみなぎる。"lust and violence" (BK. I. 496) といいかえてもよい。少なくとも nunnery scene や closet scene における Hamlet は lust と violence にみたされている。

亡霊の命令 "Taint not thy mind, nor let thy soul contrive / Against thy mother aught;" は神に対する絶対的服従によってしか可能でない。しかし Hamlet は亡霊の去るやその戒めを破って、自己の憎悪に身をゆだねた。地獄の象徴する黒い画策が彼の精神を真実に毒し、断食、不眠、憂うつがつづき、それは彼の身体と外見を変えてしまった。そして憎悪と相並ぶ淫欲が無垢な女性に対して嫉妬と猜疑を生み、同時に神の愛に代っている女性に救いと慰めを期待する空な望みを抱かせた。批評家は Hamlet と Ophelia の love-story に関心をもち、どうして彼が hell にいたこととその horrors を彼女に語ろうとしたことに注意を払わないのであろうか。緻密な H. C. Bradley はすでにこの点に疑問を抱き、love-story に多くの関心が寄せられないように Shakespeare が意図したと考えた。そして Ophelia は彼を助ける人物に作られておらず、またこの劇の主テーマを妨害するほどの強い愛を彼は彼女にもたないようにされているとのべている。<sup>24</sup> しかしこれは Bradley の誤りである。事實は Hamlet の彼女に対する愛は強烈であり (以上のべた通り)、彼女の死をもっても絶つことはできない深い余韻を残している。また Ophelia は彼を助けない人物にされているという彼 (Bradley) の主張も、そのように他人の助けを要する限り、すなわち神に絶対的な信頼をおかぬ限り、人は目的を成就できないという普遍的な真理に沙翁の作品が立つ以上、愚かな疑問である。

内村は「無識の結果」と題して曰く、

人の何たるを知らず、故に神の何たるを知る能はず、神の何たるを知らず、故に人の何たるを知る能はず、神の何たるを知らざる者は敬崇を人々に向て払い、人の何たるを知らざる者は救済の神を求めんとせず、神に依て汝等の眼の開かれんことを祈求めよ、然らば汝等は頼るべきものに頼りて、頼るべからざる者に頼らざるに至らん。

(明 35. 10)<sup>25</sup>

あとで Hamlet が conversion を経験するまでは、彼は神の愛と救済を Ophelia に求める誤りをくり返して、Ophelia を益々傷つける。Ⅲ幕Ⅰ場での nunnery scene の彼は彼女に対して神を知らざる者のおちいる自己中心性の愛を発揮して彼女を彼の egotism の犠牲にするからである。律法に忠実ならんとする者が、律法を行うどころか、「(神の) 怒りを招くものであって」、「違反」を犯すと Paul がいうように、Hamlet も亡霊の命令を守ろうとして、かえって憎しみと恋愛という「罪が」彼を「欺き」、「戒によって」彼を「殺した」(ロマ. 7. 11)。彼は地獄の devil となったのである。

Hamlet の hell と horrors とは一对具体的には何であるか。これはこの scene のあとにすぐつづく To be or not to be の soliloquy に最も関係している。この独白は、episode として考えられるべきでなく、Hamlet の前半の行動の解決の鍵がここにある。批評家はこの独白がこの独白の前後にある Ophelia との scene と深い関聯性があることを無視している。さて、それでは To be or not to be の soliloquy を次に論じよう。

附記 この論文はその骨子において昭和49年10月12日(土)～13日(日)北大で開催される予定の日本シェイクスピア学会で地元側として発表を申し出たが内村鑑三論なりとの理由によって拒絶された。

1974. 9. 30

## References

1. 内村鑑三, 内村鑑三信仰著作全集(東京, 昭47), 第6巻, 214頁.
2. 上揚書, 第23巻, 119頁.
3. 上揚書, 第18巻, 215頁.
4. Karl Barth, *The Epistle to the Romans* (London, 1968), p. 241.
5. *Ibid.*, p. 213.
6. Kanzo Uchimura, *The Complete Works of Kanzo Uchimura* (Tokyo, 1972), Vol. IV, pp. 95-96.
7. *Ibid.*, pp. 96-97.
8. 内村鑑三, 上揚書, 第16巻, 92頁.
9. 上揚書, 第15巻, 108頁.
10. 上揚書, 第8巻, 197頁.
11. Kanzo Uchimura, *op. cit.*, Vol. III, p. 228.
12. 内村鑑三, 内村鑑三聖書注解全集(東京, 昭42), 第16巻, 139頁.
13. J. D. Wilson, *What Happens in Hamlet* (Cambridge, England, 1964), p. 111.
14. G. W. Knight, *The Wheel of Fire* (London, 1964), p. 21.
15. A. C. Bradley, *Shakespearean Tragedy* (New York, 1967), p. 155.
16. Cited in B. Grebanier, *The Heart of Hamlet* (New York, 1967), p. 197.
17. B. Grebanier, *op. cit.*, p. 198.
18. L. Brodwin, *Shakespeare's Hamlet* (New York, 1964), p. 30.
19. A. C. Bradley, *op. cit.*, pp. 118-121.
20. E. Prosser, *Hamlet & Revenge* (Stanford, 1971), p. 93.
21. L. Brodwin, *op. cit.*, p. 29.
22. G. W. Knight, *op. cit.*, p. 21.
23. B. Grebanier, *op. cit.*, p. 197.
24. A. C. Bradley, *op. cit.*, p. 160.
25. 内村鑑三, 内村鑑三信仰著作集, 第7巻, 26頁.

Shakespeare の引用は Oxford University 版の *The Complete Works of William Shakespeare* (Oxford, 1955) からとった.